

# 紅い惑星

— Fuzzy Pain 2008 —



サンプルのため、抜粋ページのためのファイルです。

購入版は、改変防止のためサンプル同様に透かしとしてサークル名「体感宇宙」が入っておりますので、ご了承ください。

# 紅い惑星

– Fuzzy Pain 2008 –

## 序章

荒れ狂う風に煽られる長い髪を鬱陶しそうにかきあげながら、彼はぼつりと語り出す。

「俺の親父は下級戦士だったが、戦闘能力はずば抜けていた。若い頃から結構もてたらしいが、女よりも戦いの方が好きで、一晚共にした女の顔も三日で忘れるくらいだったらしい」

彼の声は強い風に時折かき消されて、その後ろを歩く大柄な男には断片的にしか伝わらなかった。

二人は歩きながら会話をしていた。正確に言えば、髪の長い方の男が一方的に話しており、スキンヘッドの大男の方は口出しするのにも無駄とばかりに黙って彼の後ろを歩いていた。長髪の男は、口から生まれたのではないかと思うほどとうとうとよどみなく話し続け、しかし相手に飽きさせない語り口で、何度か後ろを振り返りながら話し続ける。

「お袋が口の上手さと強引さで迫った甲斐があつて、ようやく俺が生まれたってわけ」

二人が居る場所はある辺境の惑星で、彼らが訪れるまでは緑豊かな土地であった。しかしその惑星の住人達と二日ばかりの軽い交流で、辺りはすっかり瓦礫と砂埃の舞う景色に変わってしまった。それでも彼らにしてみれば必要最小限の破壊にとどめ、惑星自体の機能は失わないよう配慮した上で、住人の大掃除をした。

彼らはフリーザ軍という戦闘集団の末端で、グループに分かれて指示された惑星に向き、そこを力づくで奪い取って軍の所有物とするのが日課であった。軍のものになった惑星はやがて時期を見計

らって高値で売り出され、その資金を元に軍は宇宙に勢力を広げていった。

「ここももう片付いた。ポッドに戻るぞ、ラディッツ」

大男は辺りに生命反応がないのを確認すると、少し離れたところで戦っていた男に声をかけた。ラディッツと呼ばれた彼は、長い髪の毛についた砂を頭をふってばさばさと払っていた。

「なあ、ナツパ。ポッドまでのんびり歩いていかないか？」

すぐにでも帰還して報告を済ませたいのか、ナツパと呼ばれた相手はラディッツが近づくと待たずに空へふわりと浮き上がった。

しかしそれ呼び止め、予定よりも早く惑星が手に入ったのだから焦る必要がないと笑う。二人とも飛行能力には長けている為、地面を歩く必要など全くないのだが、ラディッツには時折理解しがたい無駄な事を好む傾向があった。いつもならそれを鼻で笑って聞き流す相手だったが、この日ばかりは彼もどういいうわけかそんなラディッツの言動に付き合っても悪くないと従った。

惑星から惑星への移動手段として使う小型宇宙船であるポッドまで大した距離ではなかったが、自分達が散々荒らした大地が決して歩きやすい状態ではなかった。またこの惑星の住人はそこそ腕のたつ民族で、久々の遠征でなまっていた身体にはやや手ごわく、眠らずに戦い続けた疲れも手伝ってか、やる気のない足取りで二人はのろのろと歩いた。歩いている内に、頼みもしないのにラディッツはぼつりぼつりと自分の話を始めた。

「俺の事、少しは知っておいて貰いたいからな」

二人は同じサイヤ人という民族ではあったが、元々は身分が違いため、互いに出会ったのは大人になってからである。かつては王の率いる軍隊の下級戦士の出身であったラディッツに比べ、ナツパは

その風貌からは想像がつかないほど家柄は良く、王家の側近を務める家系であった。本来なら顔を合やすこともないであろう二人であったが、彼らサイヤ人が住んでいた惑星ベジータという星が、隕石の衝突で崩壊したのをきっかけに、たまたま惑星外に居た者を除き、民族はほとんど絶えてしまった。その後、故郷の星を失ったサイヤ人の生き残りは、惑星健在時から王家と親交の深かったフリーザ軍になかば従属という形で引き取られた。出身は違えど、故郷の無い今となつては、ナッパもラディッツもただの一民族の生き残り同士。上下関係はあつてないようなものである。

「いやあ、あんたに初めて会った時は、年の割にはえらい老けたおっさんだと思ったよ」

ラディッツの物言いに、少なからずエリートのプライドを傷つけられたナッパは、最初の頃は彼を毛嫌いしていた。しかし彼の飾らない性格や調子の良さに怒る気持ちも失せ、やがてタメ口にも眉一つ動かさず普通にやり取りできるほどの仲になった。

惑星ベジータが無くなれば口をきく事も無かったことを思うと、ナッパは不思議な気持ちになる。まるで昔からラディッツとはこうして語ったり、酒を飲んだりしていたかのような錯覚に陥るのである。

「そりや俺の特技だからね、誰とでも親しくなれるってのが」

口の上手さと人当たりの良さはお袋譲りなんだと、ラディッツは口の端をあげた。

「この長い髪もそうだけど、色気ある顔もお袋が美人だったお陰だからな」

彼の顔に色気があるかどうかはともかく、彼の戦闘能力の低さは母親似かと思えばもつともである。

「うわ、ひでえ。そりや確かに親父に比べりや俺なんか全然強くないし、あんたらの足元にも及ばないけどよ」

ラディッツにしてみれば、明日をも知れぬ戦いに身を置く戦闘馬鹿だった父親に比べ、男女問わず交流が広い自分は人生を謳歌していると言える。

「ただの女つたらしにしか見えんがな」

女遊びの絶えない彼に、弱虫ラディッツという名を付けたのはナッパであつたが、強い男を好む女性も何故だか彼にだけは心を許すのが解せなかつた。

「そりやあ、堅物のナッパさんには女性との楽しい夜なんてお判りにならないでしょうねえ……」

意地悪そうな笑みを浮かべ、彼にわざとらしい敬語で答えるラディッツは、この遠征に来る前も女性の誘いを断り切れずに朝まで頑張っていた事を自慢げに話した。

「ほう……。女に使える体力はあつて、遠征に発揮できない体力のどこに意味があるんだ？」

「子孫を残すのも大事な男の仕事よ？」

ナッパは額に手を当てると、がつくりと肩を落とした。

「もっかい。着いたからな」

二人の目の前には、彼らの身体よりも大きい球体が三つあつた。

戦闘でうっかりこれを破壊してしまわないように、またこの星の住人に見つからないように、ちよつと見ただけでは判らない場所に隠しておいた。それぞれ自分専用のポッドの前に立つ。ナッパがふと気付いたように問いかけた。

「何故急に父親の話など始めた？」

ラディッツは球体に凭れるように背を預け、澄み渡った空を見上

げる。いつの間にか風は止み、流れていた雲もどこかへ押し寄せられて消えてしまった。彼は左の二の腕に付けられた赤いバンドを右の指でついと撫でながら、親近感かなと笑った。

「俺の親父ってさ、遠征ばかりで殆ど家に居なかったし、死んだ時も俺が他の遠征グループに見習いで紛れて離れていたから、死に際を見ていないってのもあるんだけど…」

死んだって感じがしないんだよ、とラディッツはナツパに目を向ける。考えてみれば、父親とはあまり一緒に居なかった。小さい頃に構ってもらった思い出以外、彼が遠征先でどれだけの功績を残したかとか、どんな攻撃を得意としていたなど、サイヤ人の仲間が殆ど居ない今では聞くことも出来ない。

「俺の知っている親父は、たまに忘れた頃帰ってきて、家でごろごろして酒ばかり飲んでいろくでもない姿だったから、同じチーム組んでいたセリパ姉ちゃんとか…どこかぼちゃのおっさんとかに話を聞くくらいで本人は自分のこと全然話さなかった」

そしてあの日、巨大隕石で惑星ベジータが消滅したと聞かされたあの日も、自分の身を案じて待っている母親に会えなくなりシヨックであったが、父親と会えないという意味がぴんとこなかった。いつもより長い遠征でまだ帰ってこないだけのようにも思えたのだ。

「俺は母親の血が濃いせいかな、サイヤ人には珍しく戦う事にそれほど執着心が無かった。戦闘馬鹿の親父の気持ちなんて判らなかった」

父親の持つ戦闘の素質とやらは自分には受け継がれなかったらしいと子供心に理解をし、どうせ弱いならわざわざやれに出向くこともないし戦いには消極的になった。長い髪も母親似であった。何もかも自分とは違う父親。自分と彼の間には親子とは名ばかりの届かぬ距離があった。

「それなのに今更…俺に『置き土産』だとか？笑っちゃうだろ」  
彼が残したのは二つ。

一つは望みもしないのに与えられた、余計なもの。

「最初は何も言わなかった親父を正直恨んだぜ？てめえのせいで俺もなっちまったじゃねえかと」

ナツパは、ラディッツが触っている二の腕の赤いバンドと、左の腿の辺りに付けている同じ色のバンドに目をやった。最近ラディッツはこのバンドをよく付けている。父親の形見としてドクターから貰った特別なものだった。

「こんなバンド位じゃ、俺の身体の歪みは押さえられないって判っているんだ。だけど負け知らずの父親の品物だからな、縁起はいいかもしれないって程度で使ってたって…」

不意に言葉が途切れ、じっと俯いてきいていたナツパは顔をあげた。見るとラディッツが左の胸の辺りを押さえて、背を丸めていた。ふらつく足元でバランスを崩し、ずるずると球体のカーブに沿って落ちるように地面に尻餅をつく。

「情けねえな…」

駆け寄るナツパに支えてもらいながら立ち上がる。

「その身体、とうに期限は過ぎているよな」

ナツパが肩を寄せて問いかける。彼はああと頷いて、予想外に長生きしている、と自嘲気味に肩を竦ませた。いつ事切れてもおかしくない状態であった。立ち上がった後も暫く動けず、ぐっと奥歯を噛み締めて痛みに耐えていたが、数分後には大きく息を吐いて背筋を伸ばし、ナツパに向き直った。

「けどまだ俺は死ねない。あいつがフリーザという足枷から自由になるその日まで、死ねない。こんな辺境の地での戦いで命を落と

すわけにもいかないんだ」

そう考えたら、効くかも判らない父親の形見にさえ縋るのも悪くなかった。

「俺には時間がない。こんな厄介な身体を残してくれた親父に蹴りの一つでも入れてやりたいさ」

だが、ラディッツの顔には言葉ほどに怒りはなく、それはどこか諦めた笑顔でもあった。

「あいつが残したこのバンド、そしてこの身体……」

彼は二つの存在を意識する内に、父親を近く感じるようになった。生前はその背中があまりにも遠くて追うことさえも諦めてしまった相手が、急に向こうから近づいてきたようだった。

「そんなこと思うなんて、俺もやきが回った」

ナッパの肩越しに見えるポッドが一つ。それは今ここには居ないもう一人のサイヤ人のものであった。

「ベジータ、遅いな」

ナッパが話題を変えようとして、そのポッドの持ち主の名前を口に出す。ラディッツは曖昧に相槌を打ちながらも、そのポッドから視線を逸らさなかった。消滅した惑星と同じ名前を持つ、もう一人のサイヤ人。

（親父、俺を地獄に呼び寄せるにはまだ早いからな）

ラディッツには守りたいものがあつた。守るなどおこがましいほどその相手は強く、自分はその足元にも及ばないほどのエリートである。しかし彼の内側に秘める弱さを知っている。身体的に守ることが不可能ならば、精神面で彼を支えようと決めていた。

「噂をすれば、王子のご帰還だ」

ナッパがスカウターに突如現れた戦闘値に、にやりとした。ラデ

イツもそれに気付いて頷く。その数秒後に、その戦闘値の主が二人の前に降り立った。

「遅かったな、ベジータ」

わざと陽気にナッパが声をかけた。

「お前達の受け持った地区に生き残りが居ないかチェックしてきたのだ」

高飛車な物腰で言い放つ相手は、小柄な身体には不似合いなほどにその体内からパワーを燃え上がらせていた。自分のポッドの前に立つと、すっと短く息を吐く。すると今まで彼の周りの空気を震わせていたパワーがやや落ち着きを見せる。

「ベジータ……まさか怪我……」

彼の顔半分に見つ赤な血が流れていたので、ラディッツはぎょつとしたが、彼はあつさり相手の血だと答えた。

「少々派手に片付けたからな。この星の民族も、偶然我々と同じく赤い血だったらしい」

洗い落とす暇が無かったただけと付け加え、ベジータは戦闘服の袖で顔を拭いた。

「他人の心配より自分の心配をしたらどうだ、ラディッツ」

彼が指差す先は、ラディッツの左肩であった。大した傷ではなかったが、紛れも無くラディッツ自身の血が流れていた。

「貴様はいつも左側ばかり怪我をするな。戦いにムラがある証拠だ」  
「相変わらず、手厳しい」

仲間といえども心配はしてくれない。但し彼の指摘はもっともある。ベジータは時間の無駄だと二人に帰還を促し、自らはポッドに乗り込んだ。三体のポッドは惑星を後に、宇宙へ飛び出した。



## 第二章

恐怖の紅。

激しさの紅。

安らぎの紅。

沈みゆく紅。

生きている証の紅。思いのたけを込める紅。

大地の紅。夕陽の紅。人を飲み込む自然の紅。

紅の大地と、闇に飲まれる前の空の色。

どれほど力を手にしても、生物の存在がちっけなものだと思いきらされる、この自然の中では。

水も緑もろくにない、乾き切った大地。

流す血も、流す涙もない、渴き切った人間。

この惑星も人間も、なんと紅いことだろう。

がら突き上げるように腰を動かした。

「……うっ……く……」

何度か抜き差しして果てると、相手も満足そうにシートに身体を沈めた。彼女が気を失ったのを確認し、ラディッツはそっとベッドを抜け出して、部屋に備え付けのシャワー室へと向かった。

「気分はすっきりしたが、暑さは変わらないな」

このままここで朝を迎える気にもなれず、ラディッツは身支度を済ませるとその部屋を後にした。二時間ほどは経っただろうか。だらだらと歩いて自分の部屋を目指していると、随分と先の廊下の角に人影を見つける。この時間に起きている人間など、見回りの兵士以外にはまず居ない。

（あの背丈と髪型……ベジータかな）

その影はよろよろとしながらも後ろを気にしつつ、こちらへ歩いてきた。

「よう、ベジータ。眠れなくてお散歩？」

からかうつもりで明るく声をかけると、びっくりと肩を揺らして相手がこちらを見た。何かに気を取られて、ラディッツに全く気がつかなかったようである。

「そんなに驚かなくてもいいだろ」

「……貴様、ここで何している」

ベジータは抜けきらない酒の匂いがラディッツからしているのに気付いて、眉を寄せた。

「ちょーつと女の子と……。そういうベジータはどうなんだよ。王子様がこんな時間に起きていたら駄目だろ」

「うるさい」

（絶倫なのはどっちだよ）  
相手の首にキスを繰り返して、ラディッツは内心面倒臭いと思いつつもは軽く交わされる程度のからかいなのに、彼は苛々とした

様子でラディッツから視線を逸らした。その素振りに違和感を覚えながらも、まだ酔いの冷めない彼は、ぶかぶかのシャツ一枚でうつく彼を抱えた。

「おい、何をする！」

「お部屋にお連れします、王子様…」

まるで荷物を抱えるように小脇に挟まれ、ベジータはじたばたとした。その気になればラディッツ程度の戦闘力なら、片手で吹っ飛ばせたのだが、酔っ払い相手にこんな夜中に面倒を起こしてフリーザに文句を言われても面倒だとぐっと耐えた。

「はい、到着」

勝手知ったる王子の部屋とばかり、ベジータの部屋の暗証番号をいとも簡単に入力し、ラディッツは入り込んだ。

「貴様、俺の部屋の番号を…」

「ほらほら、おねんねしなさい」

ベジータを無理やり布団の中に押し込め、その頭を撫でてラディッツは「ご機嫌であった」。

「眠れないなら子守唄でも…」

「いらん、さっさと帰れ」

枕を顔面に食らい、ラディッツはそそくさと部屋を出た。

（それにしてもあの傷…）

ベジータを抱き上げた時に気付いた、肩口の傷跡。噛み傷のように見えた。ベジータほどの腕前であんな場所に攻撃を許すとは不可解であったが、酔っていたせいもあり、ラディッツは部屋に戻った頃にはすっかり忘れてしまった。

「え？フリーザ様が？」

朝日の差し込む食堂の片隅で卵焼きを食べていたラディッツは、フォークを持つ手を止めた。向かいに座っているナッパは、辺りに聞こえないようにぼそぼそと話し続ける。

「そう。フリーザ様が軍の所属兵の中から若いエリートを選んでは、夜な夜なご自分の寝室に…」

「連れ込んでいるのか?！」

「声が大きい！」

ナッパは慌てて彼の口を両手で押さえ込んだ。このフリーザ軍は占領した惑星の中でも知識や文化のすぐれた民族、技術や戦闘に長けた民族を中心に、少しでも見込みのありそうな人材であれば軍に引き入れ絶対の忠誠を誓わせる代わりに、その生活を保障していた。フリーザ一味の手足となり遠征に行く者、もしくはそれを援護するための技術スタッフなど、多種多様な民族がそれぞれの場所に配置されている。そして中には、かつて王族であった身分の者も少なくなく、ナッパ達サイヤ人で言えば王子であるベジータもそれに当たる。噂によればフリーザは半ば強引にそれぞれの民族から戦闘員を引き抜いてきた自覚があるのか、彼らが反旗をひるがえさないよう、時に人質の意味でそれぞれの王家の血を引く人間、ことに若い人型タイプを好んでベッドに連れ込み、逆らうことの無意味を教え込むのだとか。

「もしやと思うが、うちのベジータもそのうち…」

ナッパは青ざめた顔で、歯をがちがちとさせながら自分の予想をラディッツに話した。

「…そういえば…」

ラディッツは二日前の夜に、廊下でベジータを見かけたことを思い出した。その時は特に気にも留めなかったが、彼は普段よりも落



ち着きが無く、また彼の出てきた廊下はそのまま進めばフリーザの部屋に繋がる道だった。そこまで口にして、はっとしたようにラディッツはナッパを見る。ナッパもショックで目を白黒させながら、ラディッツを覗き込んだ。

「いやいや、偶然かも知れないし」

否定するラディッツに、ナッパは確かめなければと拳を握る。まさか本人にずばり聞いたところでプライドの高い彼が白状するとは思えない。ここはその現場をこっそり探るしか無かった。

「探る…って、フリーザ様の部屋に忍び込むのか？」

「…う、無理だな」

どう考えてもまず忍び込めない。いや上手く入れたところで見つかったら最後殺されるだろう。

たとえ本当にベジータがそういう面での犠牲になっているとしても決して言わないであらうし、ラディッツ達も知ったからといって何かしてやれる訳でもない。見て見ぬ振りをするしか無い。

「フリーザ様も大事な人材にそう酷い扱いはしないだろう。現にこの間のベジータとて、怪我一つしていなかったわけで…」

そんな科白を吐く傍から、唇は乾いた。想像でしかない事柄を少しでも良く解釈しようとする虚しい試み。ナッパも、自分から切り出した話題の癖に黙り込んでしまった。

「こんなところで何をしている」

急によく通る声が響き、二人はびくりと顔を強張らせて声のした方を向いた。そこには今まさに話題にしていた相手が、腕組みをしながら立っていた。昼飯をとっていただけだと苦笑いで目配せをし合う二人を、ベジータは胡散臭く見比べた。

「次の遠征先が決まった。二人ともよく読んでおけ。それから、こ

こ数日オフが続いて二人とも身体が訛っているだろう」

俺が相手になってやるからついて来いと、嬉しくも無い特訓のお誘いに二人は渋々食堂を後にした。先頭を歩くベジータの背中を見ながら、ラディッツとナッパは互いに先程の疑問をどう彼にぶつけようかと無言のやり取りをしていた。廊下を歩いている途中で、フリーザの側近であるザーボンと擦れ違った。彼はベジータの横を通る際に後ろの二人に聞こえるか聞こえないかの声音で口を開いた。

「フリーザ様はお前を酷く気に入ったご様子だ。また今夜、あの方の褥に上がるようにというご命令だ」

瞬間、ラディッツはザーボンの胸倉に掴みかかった。しかし必死にナッパがそれを止め、二人を引き離れた。

「ふん、お前たちごときに何が出来る」  
彼はほどこてもいない自慢の髪を編み直すと、冷めた目でベジータに視線を送った。当の本人は注がれる視線をあえて無視して先を歩こうとしていた。その表情には何の感情も読み取れない。

「当の本人の方がよほどわきまえているではないか」  
ザーボンはベジータに、部下の躰をちゃんとしておけよと酷く優しい声で言い残して去って行った。

「なんだよ、あれ…」

ベジータによる特訓という名のストレス解消に付き合わされたラディッツは、歩くのも億劫になるほど身体が疲れ切ってボロボロになった。同じく付き合わされたナッパは、だらしないなと果れながらも食堂まで連れて行ってくれた。

「ザーボンの前では冷静を装っていたが、ベジータも相当頭にきているんだろうな」

機嫌の悪くなった彼の標的にされたラディッツは、遠征よりもハードな特訓を強いられた。なぜ自分ばかりが酷い目に合うのだと納得のいかない彼であったが、ナッパにしてみれば、戦闘能力の低い彼を鍛えてやるというのは建前である。潔癖な処のあるベジータにしてみれば、女遊びの目立つラディッツが気に入らない。

「仕方ないだろ、お年頃なんだから…ラディッツさんはあ…」

おどけて言くと、すかさずナッパの拳が飛んできた。

(潔癖…ねえ…?)

殴られた頬をさすりながら、ラディッツはザーボンと擦れ違った時のベジータの横顔を思い出していた。

(潔癖なら尚更、フリーザの奴にどうこうされるなんて受け付けないんじゃないのか?)

生理的に吐き気を催す行為に対し、相手の目の前で平静を装う事の難しさは大人であるラディッツにでも至難の技である。それをサイヤ人の誇りというただ一つのプライドに縋って、自分を押し殺すベジータ。小さい頃からそうやって、自分を殺して、相手を油断させる術を教え込まれていたのだろうか。

早目の夕飯を済ませ、自室で飲むと言ったナッパの誘いを断って、ラディッツは筋肉痛で痛む身体を引き摺りながら、のろのろと自分の部屋へと戻った。

「この土地も紅いのに…」

ラディッツは一人、窓際に凭れながら、手酌で酒を飲んでいた。ガラスの向こうは暗いながらも人工灯に照らされ、彼ら軍の基地とされている惑星フリーザNo.79の赤茶けた大地が見えていた。緑は殆ど無く、人工的にならした大地は痩せこけた養分の無い粗悪な土であった。それでもこの紅い大地を見てみると、記憶の中の故郷であ

る惑星ベジータを思い出す。

「昔、俺達のご先祖がツフル星に來たばかりの頃は、緑溢れる惑星だったらしいが」

それをサイヤ人が滅茶苦茶に荒らし、大人しいツフル星人から文化や技術を含めて奪い取った時には、このような紅い大地になっていたという。勿論、緑の惑星だった頃を知らないラディッツは紅い土地こそ惑星ベジータの象徴であり、思い出の色であった。いわば心の中に残る故郷は紅い惑星であった。そして現在の住処である惑星フリーザNo.79もそんな紅い惑星であった。

「今はここが俺達の故郷…か」

純粹なサイヤ人だけの惑星などもう存在しない。自分が身を置くこの場所は、フリーザという圧倒的な力の元に集まった雑多な民族の寄せ集めの星である。しかし今、ラディッツの目には故郷の惑星が見えていた。

「あの色は、本当に大地の色だろうか」

サイヤ人がそれまで殺戮を繰り返し、流し続けてきた血が大地に染み込んで紅い色になったようにも思えた。そこに自分たち民族の歴史が染み込んでるように思えて、いつそ故郷への思いは募る。

「珍しく部屋に大人しく居るじゃないか」

掛けられた声に振り返れば、入口にベジータが立っていた。てっきりまた女の尻でも追いかけているのかと思っていた、と彼は意地悪く笑みを浮かべた。ラディッツはまだ馳せていた故郷への思いから現実に戻り切れていないのか、半ば焦点の合わせぬ視線で彼に無言で首を横に振る。

「確かに、惑星ベジータの紅い大地は血の色だとする説はあったな」  
ベジータは次の遠征の資料をぼんと近くのテーブルに投げて、我

が物顔で部屋に入り込むとクローゼットの前に置かれた椅子に腰掛けた。

「なんだ、俺の独り言きいていたのか」

自分とて一人になりたい夜もある、とラディッツはすばやくカーテンを引いた。

「貴様でも感傷にひたることはあるとはな」

ベジータはふんと鼻で笑って、ぐるりと部屋を見回した。自分の部屋と同じく殺風景だが、何処かが違う。女を連れ込むせいで、香水の匂いでも残っているのかと最初は考えたが、そうではない。ただ明らかに第三者の手が加わった感じがして、ベジータには不愉快な部屋であった。

「しょうがないだろ、俺が寝ている間に彼女達が不精な俺を見かねて色々世話を焼いてくれるんだから」

それに比べて、ベジータの部屋は必要最低限しか家具も衣服も使われず、ナッパのチェックも行き届いてこぎれいであったが、どこか生活感の無い無機質な雰囲気があった。

「何故貴様はそうも女好きなんだ。そんな下らないことに体力を使うから、戦闘力が上がらないのだろう」

「じゃあ俺も言わせて貰うけれど、ベジータくらいのお子様には判んないかもしれないが、俺くらいの年になると種の保存っていう無自覚の意識が働くんだよ」

くだらないと一瞥をくれる彼に、ラディッツは近づいた。座る彼の目線まで腰を落として、じっと顔を覗き込む。

「女の子はね、こうして見つめると言葉にしなくても理解してくれるんだ」

ラディッツは口説く時にそうするように、相手の両耳の辺りに指

先を持っていつて顔を包み込むように添えると、鼻先まで顔を近づけて、相手の反応を見る。しかしベジータは鬱陶しそうにその両手を払い、俺にやつても無駄だと返した。

脳の殆どが戦いにしか興味のないベジータに、自分の趣味趣向を理解されようとは思わない。それ相応の年になればこのベジータとて、人間である以上に雄であることを意識する時期がくるだろう。

（雄であることを…か）

不意に昼間のザーボンの言葉を思い出して、ラディッツの思考は急激に冷めていく。恋愛のれの時も知らない無垢な魂に、フリーザは行為を強要しているのかと思うと、胃が軋む思いだった。

「ラディッツ、この腑抜けた面をいつまで近づけておく気だ？」

ベジータが一発殴って引き離そうかと迷った直後、ラディッツの右手が彼の顎をぐいと引き寄せ、その唇が重ねられた。

「何をする！」

一瞬の間を置いて、ラディッツの身体はベッドの横まで吹っ飛ばされた。ベジータは眉を寄せてあからさまに嫌な顔を向けながら、口を拭って相手を睨み付けた。

「何だろうな、俺にも判らないさ」

ラディッツは強く蹴られた腹をさすりながら、よろよろと立ち上がった。一人、自分達の知らぬ処でフリーザの所業に耐えていたベジータを想像したら、胸の中が黒い霧に覆われて、自然とベジータにキスをしていたのだ。

（同情？いや、違うな）

なぐさめでもなく、ただ衝動的に彼に何かをしてやりたかったのだ。それはキスではなくて抱擁でも良かったのだが、手っ取り早く目の前に唇があったのでそれで済ませた。

「お前は、いつも行動が不可解だ」

彼は、遠征の資料に目を通しておくようにと言に残すと、部屋を出て行くとした。その背中に待ったをかけたくて、ラディッツはつい口走っていた。

「…フリーザにも、今みたいにキスされたのか？」

ドアに触れようとしていたベジータの動きが止まった。それを見て、ラディッツは地雷を踏んだかと身を硬くしたが、相手の怒りの拳は飛んでこなかった。

「ザーボンの馬鹿が言った科白のことか？」

ゆっくりと顔だけこちらに向けて、ベジータはラディッツの視線を逸らすことなく受け止めた。そこには屈辱的な行為を知られた事に対する恥の感情は無く、僅かに見えるのは苛立ちと悔しさであったが、それも冷たい表情にひた隠しにして、気にも留めてない風を装っていた。

「寝首をかくという言葉もあるだろう。俺はその機会を伺うのに丁度良いと思っているがな」

ベジータは、フリーザが強要してくる行為が快楽を得る為のものだというのは理解していた。そして相手が自分に望む反応は、怯えて泣き叫んで許しを請うような愚かな言動だということも察しがついた。しかし相手の思惑通り動いてやるものかという固い意志と、ここで折れてなるものかというサイヤ人の王子としての誇りが、彼の心を冷たく凍らせていた。

「何のつもりだ、ラディッツ」

視界が黒く覆われたと思ったのも束の間、太く力強い腕に自分が抱き締められているのにベジータは気付いた。

「氷はいつか熱に溶かされる。いつまでもその意思を貫けるとは限

らない。お前がいつの日か行為の意味を身体でなく頭で理解するようになつたら…と思うと…」

ナッパから以前きいていた。ベジータは大人顔負けの戦闘力を有してはいるが、精神は未熟なままだと。戦術における駆け引きや周到さはあっても、人間としての心の理解が不十分なのだ。それが今は彼にとつての救いとなるだろう。しかしいずればベジータも辱めを受けている事を理解する。その時が来るのが、ラディッツには恐ろしかった。果たしてその際に彼が精神の均衡を保てるのか、保てなかったとしたらどうなるのか。

「何を心配しているのか判らないが、先程の貴様の質問に一つ答えようか」

ベジータは再びラディッツを蹴り飛ばすと、皺の寄ったアンダースーツの袖をはたいて直した。

「さっきお前がしたような事、フリーザはしなかったな」

彼は唇をべろりと舌で舐めた。そして部屋を出て行った。一人残されたラディッツは、腹をかかえて痛みにしばらくうずくまっていたが、荒く息を吐くとうようやく顔を上げた。それでも床に尻もちをついたまま暫くは立てそうにも無かった。

「ベジータの初キスは俺が頂いたってわけか。そりやどうも」

女性との甘いキスとは比べ物にならない、なんともそっけないキスではあったが、ベジータのまだ侵食されていない聖域にお手つきしたような気分でラディッツはうっすら笑った。しかしその笑みもすぐさま抜け落ちる。

ベジータを抱き締める際に気付いた、首元の歯型。以前に見つけた時よりも深かった。あのアンダースーツの下には、それ以上に傷を負っているのかも知れない。そう考えると、ラディッツの背はぞ



くりとした。

荒地の獣だってもう少しまともな造形をしているが、あのフリーザはそれ以下の奇妙な体軀である。尻尾の一振り、弱い兵士は即死する。

「寝首をかくだつて？その前に、お前が殺されちまうさ」

しかし絶望的に思うラディッツとは裏腹に、当の本人はフリーザ打倒の野望に微塵も揺るぎはなかった。彼の瞳が澄んでいる限り、彼の精神はフリーザの支配など全く受けないだろう。

「なあ、ベジータ。俺はお前に何をしてやれる？」

ラディッツは彼の消えたドアをいつまでもぼんやりと見つめていた。今はただ、ベジータを見守るしか出来ない。

# 体感宇宙



## 第四章

「すっかり声の方も良いみたいです、安心してましたよ」

完治した彼が姿を現すと、やけに優しい口調でフリーザが微笑んだ。ベジータは何も言わず頭を下げただけである。仕事にも復帰し、リハビリも兼ねての遠征も参加した。

「あれだけ長い間ベッドに寝たきりだったのに、全然体力落ちていないなあ」

ナッパが彼の戦いを見守りながら、もぐもぐと携帯食料を口に運んでいた。ラディッツもその横で水を飲みながら、上空で戦うベジータから視線を外さなかった。遠征は三人で来ていたが、ベジータがなまっただけの身体をほぐす為だといって、手出し無用と二人に言い放った。

（それでも三十分であの疲れよう、やはり感覚がまだ戻らないのか）

ラディッツはベジータの技のキレが悪いのを見抜いていたが、ナッパがそれを指摘しないのは気付かない振りをしているのだとも薄々感じていた。治療機械を使って治してさえいれば、体力はそのままにパワーアップできていただろう。サイヤ人は瀕死の重傷を負う度に、治ったときに数倍の力をつけてきたのだ。

「フリーザ様もその辺り知っていて、機械を使わせなかったのかもな」

ナッパは、大きな手をラディッツに差し出した。ラディッツは黙って水筒を手渡す。

「ベジータが寝たきりだった間、なんとかかっていう辺境の地の民族の若い戦闘員がフリーザ様の犠牲になったんだとか」

ベジータのように力がある者ばかりではない。フリーザの他愛な

い悪戯に命を落とす者も中には居る。

「ずっと代用で済ませてくれりゃ、こっちも有り難いのによ」

この遠征が終われば、休暇がやってくる。そして休暇に入る最初の夜、フリーザは間違いなくまたベジータを呼びつけるだろう。

「このまま俺達、とんずらするか…?」

「馬鹿いえ、そんなこと許されるか!」

ナッパの拳が飛んできて、ラディッツは土ぼこりと共に渴いた大地にひっくり返った。

「逃げられるものなら、俺だってベジータを逃がしてやりたいさ」  
悔しげにナッパは歯を鳴らした。二人は通信に自分達の会話がないよう、スカウターを外してベジータを待っていた。ゆえにいつの間にか敵を片付け終わったベジータが二人を呼んでいるのに、しばらく気付かなかった。

「何をやっている、さっさと帰るぞ!」

珍しく汗を拭ってベジータが二人の所へ降りてきた。ナッパとラディッツは渋々とスカウターを装着し、広げていた飲食物を片付けると立ち上がった。

「遠征っていったって、俺達ほとんど何もしてないからなあ」

ラディッツは戦わなくてラッキーだったけどと語尾に付け加えて、ポッドに乗り込む。それをじろりとらんでナッパも自分のポッドに乗り込む。ベジータは先にさっさと乗り込んでいて、離陸の準備を整えていた。

（…またか…?）

ポッドの開閉口の丸い窓から、ベジータとナッパの離陸する様子を見ていたラディッツだったが、急に襲ってきた身体の痛みになかなか発射ボタンを押せずに居た。しばらくこなかった痛みなので忘

れていたが、この心臓をえぐるような痛みは一体何なのだろう。

「畜生……」

搾り出すように声を出すと、幾分か楽になった。五分もすれば痛みは薄れていく。今回の遠征は怪我をするような事もない、とても楽な仕事であった。惑星特有の病気を拾ったわけで無いだろう。どうにか発射ボタンを押し、離陸すると、ラディッツは背凭れに体重を預け、あえぐように深呼吸を繰り返した。大気圏を抜け、ポッドが宇宙に放り出された頃、ようやく痛みはおさまり、身体も自由に動かせた。

「一体、この身体どうなっちゃったんだ」

女性に病気でもうつされたのだろうか。もしそうなら、情けなくてベジータ達には打ち明けれないかと苦笑いを漏らす。帰ってから医務室に顔を出すか、とぼんやりドクターの顔を思い出す。

（帰ったら…、ベジータはフリーザの…）

医務室だけでなく、ついでにフリーザの顔まで思い出してしまい、ラディッツは唇を噛んだ。このまま惑星フリーザにポッドが着かなければいいのにと、帰還までの移動時間である二日が永遠に続いてくれることを願った。

休暇の一日目をだらだらと部屋で過ごしたラディッツは、いつの間にか夜になっていたと窓の外を見て気付く。移動中は医務室にでも行こうかと真面目に考えていた気持ちも、惑星フリーザの形がポッドから見える頃にはすっかり忘れていた。忘れていたというよりは、ベジータの心配が優先して、自分の事にまで気が回らなかった。

女性との約束もすっぱかし、何をする気にもなれずに、ベッドで

寝転がったり読みもしない本のページを無駄に捲ってみたり。酒場に行く気分でもなかったので、ナッパのところにも行くかと柵から適当に酒を見繕っていると、ドアのあたりで気配がした。

「…ベジータ…」

ラディッツは持っていた酒の瓶をうっかり落としそうになった。「なんだその顔は。立ち寄ってくれと懇願したのは貴様だろう」その科白に、彼がフリーザの部屋から出てきたのだと気付いた。（まさか本当に俺の部屋に来てくれるなんて）

なかなか動かない彼に業を煮やし、ベジータの方がつかつかと部屋に入り込んだ。

「そっちが言い出したんだ。召使がわりに使ってやる。シャワーに連れて行け」

その科白にはっとしてラディッツは瓶を置き、替わりにベジータの身体を担ぐと風呂場に歩き出した。

「俺は荷物じゃない」

シャワー室に入ると、ベジータの衣服を脱がしてやり、自分は着衣のままシャワーのコックを捻った。全裸のベジータは良いが、シヤツもズボンもそのままのラディッツは水分を含んで重くなった袖口をまくり、動きにくそうにしていた。

「貴様も一緒なのか」

不満そうな声に、召使ですからちゃんと世話しますとラディッツが微笑んだ。頭からつま先までびっしりと自分も含め身体が濡れたのを確認し、シャワーを止める。石鹸とスポンジを手に取り丁寧に泡立てると、まず肩から洗い始める。こすり過ぎないようにと配慮するのは、女性を洗ってやる時と同じ感覚である。

「そっぴや、腕もすっぴかり綺麗にくっぴいたな」

筋肉はついてているが自分に比べれば細い腕を手に取り、スポンジでこすりながら曲がって骨がついていないかを確認する。

「貴様とは日ごろの鍛え方が違うからな」

「はいはい」

当たり障りのない会話を交わす二人であったが、ラディッツは相手の身体に残る紅い斑点のような痕に内心穏やかではなかった。この細い身体をフリーザの動物的な身体が這い回り回ったのかと思うと、吐き気がする。

「ラディッツ…」

考えている内に会話がおろそかになり、ベジータが振り返った。丁度良いとばかりに胸から腰にかけて、スポンジを滑らせていく。

「ここ、あいつに弄らせたか？」

ラディッツは、ベジータの足の付け根に手を伸ばすと、泡のついた指先でそこを軽く握った。

「貴様、その手を離せ」

身体を洗うのは任せたが、弄ってよいとは言っていない。しかしラディッツはスポンジで辺りをこすりながら、泡ですべる手で必死にそこを扱き始めた。

「おい……」

ベジータの表情が陰しきから焦りに変わっていく。

「フリーザとやったからって、大人になったことにはならないからな。ちゃんと気持ちよく交わした行為じゃないと本当の性行為じゃないから」

ラディッツの声が浴室に反響し、何重にも聞こえる。ベジータのそこは嫌がる感情とは裏腹に硬く勃ち上がった。

「俺、本来はしゃぶって貰うほうが好きなんだが…」

急にラディッツが相手の足元にしゃがみこみ、そこを握ったまま首を捻って呟いた。何を言っているのか判らないベジータは、彼の次の行動に思わず腰をひいた。しかしラディッツの左手が後ろから腰を抑えて、動きを封じた。

「…うっ…」

自分のそれがラディッツの口に銜えられ、普通ではありえない構図にベジータはぞっとする。しかし青ざめたのも束の間、ざらりとした舌先が先端の段差を執拗になぞり、それが次第に快感に変わっていく。身体中の熱が一点に集中した。

「…っと、タンマ。俺そういう趣味ないから」

射精寸前でラディッツの指がきつく締め上げ、ベジータは膝を落としそうになる。しかし倒れないようにラディッツが支え、ベジータは彼のシャツに両手でしがみついた。

「ベジータのそれ、口に出されるとその後でキスする気が萎えるからさ」

「何を…言って…」

ラディッツの唇が、ベジータの首筋に押し付けられた。思わずベジータは言葉を飲み込む。触れた唇が熱いのは、シャワー室に充滿した湯気のせいだろうか。先程自分のあそこを煽った舌が、今度は顎のラインを辿りだす。

「な、ベジータ。気持ち良いってこういう事なんだ」

片手で彼の背中を支え、もう片方の手で硬くなったそこを扱く。太い親指が、先端をぐりぐりと刺激し、ベジータがシャツを握り締める手に力を込める。瞬間、ラディッツのズボンに白い液体が散った。

「結構出たな。ああ…、深く考えずに着衣のまま入って失敗だ」